

## 第六章 民謡と俗信

### 一 労働歌

#### 1 田植え歌

- 1、チヨチヨと鳴くはひよどり、鳴かぬは深山のおしどり
- 2、おさんばいはささでおろそよ、ささでさらりとおろそよ
- 3、一六で連れた女房を、磯打つ波にとられたとられた
- 4、打つ波はおれのかたきぞ、もどせよ沖の白波
- 5、おさんばいの神は庚申様よ、馬から降りて笠をとれとな
- 6、愛らしや山の柴栗、はやか  
ねつけてにこにこと
- 7、しろ引きはしろに追われ  
て、かぎなるくわをかつ  
いだ
- 8、そろたそろたよ植手がそ  
ろたよ、苗もほどよく伸  
びて、ほらきょうこそ田  
植えどき
- 9、春咲くはうつげ卯の花、五  
月に咲くは紅の花
- 10、この街道ははでな街道よ、  
下れやきぬの下棲
- 11、さんばいはささのものぞ



田 植 え

- 12、さんばいはあらたの神よ、馬からおりて笠をとれ
- 13、このせまちはながせのせまちよ、だんなのものも長かるう
- 14、おさんばい様の腰かけの小松、太れや小松枝も栄えよ
- 15、五月には組のより、はいさんかたびらに花染めて
- 16、太山寺の山はまあらにこそ世に取れ、頭ははげてもとは黒々と
- 17、若殿様の腰掛けの小松、太れよ小松の枝も栄えよ小松
- 18、やりたや文を小松五郎様に、ほうしょうの紙に細々と書いてよ
- 19、日暮れの鳥が笠のぐるりを回るぞ、まいとて回るのか上りとて回るのか
- 20、山田の稲はあぜにもたれかかる、一七、八は殿にもたれかかる
- 21、まだけさは霧の最中よ、静かに渡れ石橋を
- 22、石橋は、四〇と二のもの、つれそう殿は二一
- 23、日の暮れ暮れに駒をどこにつないだ、うね谷越えてとうな草につないだ
- 24、若殿の後姿に牡丹の花が二枝、一枝咲いておれてあと一枝は咲きわけ
- 25、植えよいは苗の取りようよ、寝よいは殿の腕枕
- 26、あさはかに肥をならせよ、ならさぬは寝ごえよ
- 27、若殿の後姿に牡丹の花が二枝、一枝は神に供えるまた一枝はわがのもの
- 28、おさんばいは酒に酔うたかこのひじり、一夜は情けに酔うんぞなひじり
- 29、ひるがおはお茶で慰め、夜こそ夜妻が欲しかろう
- 30、ひるびるは田植えが続く、大勢の人たち急げよ急げ田植え歌
- 31、山かげを見えつかくれつ、そはいそいそと来もせず
- 32、松前のおたが出合いの川で、小遣銭がぎれてあじやさばの切り売り
- 33、日の浦の土居にやたい松はいらん、花嫁さんのべにに金の光
- 34、よばいに行行ったがもどる道を忘れた、ゆうの木に登りたらの木へ降り  
て来い
- 35、住みたいわ、久主と安場よ、まだおりたいわ柳井川

36、日は暮れるいぬにやいなれず、旦那のお暇のでるまでは

## 2 田の草取り歌

- 1、はえたはえたぞこの田の草は、せりにいも草はりめ草
- 2、草をとりましようご念を入れて、稲に黄金の花が咲く
- 3、つらいようでも田の草取れば、秋の取り入れ楽しみな
- 4、わたしやいやじゃよ役人の嫁は、泣いてすがろにや袖がない
- 5、娘行かんかお倉の瀬戸に、こごめ桜の枝折りに
- 6、かわいい殿御と田の草取れば、水の濁りで手を握る
- 7、わたしとあなたは麦わらだより、切れてその後たよりなさ
- 8、所はなれてとんではいれど、切れてくれなよたこの糸
- 9、広い広島の水飲みそめて、いやよ田舎の濁り水
- 10、親の意見と茄子の花は、千に一つのあだがない
- 11、わたしや百まで主や九九まで、共に白髪のはえるまで
- 12、立てばしゃくやくすわれば牡丹、歩く姿は百合のよう
- 13、酒じゃ思い出し、たばこじゃ忘れ、口にやものぞや、学校の生徒は、いつも袴はかまに手に鞆かばん
- 14、鐘がなるかやしもくがなるか、鐘もならなやしもくもならん、鐘としもくくの愛がなる
- 15、ややはできます三月でござる、梅が食べたやすゆすゆと、今度来る時やもて来ておくれ、裏のこやぶの青梅を

## 3 白ひき歌

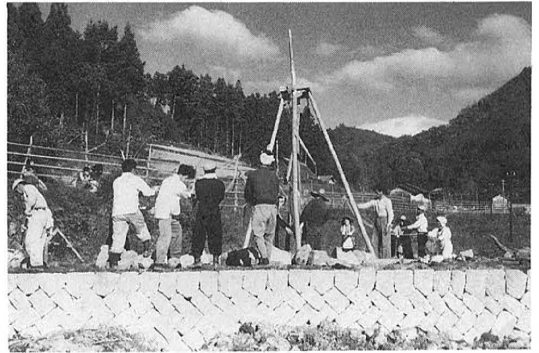
- 1、白よまえまえやり木を連れて、二〇日と五日にや暇をやるぞ
- 2、二〇日と五日は毎月ござる、末の五日は暇をやるぞ
- 3、今年や豊年穂に穂ができて、道の小草も米がなる
- 4、とろりとろりとまわるは淀の川瀬の水車、かけたたすきの切れるまで

- 5、白よまわれよやり木を連れて、中のしんぎのまわるように
- 6、白がまわるほど心がまわりや、かわいい殿御はとらりやせん
- 7、白よまわれよまんまるまわれ、師走八日にや暇をやる
- 8、白よまわれよしんところろ、かけたたすきのまわるように
- 9、とろりとろりと眠たいおりは、かわいい殿御も来りやよかる
- 10、うちとあんたは白ひきじょうず、入れてまわして粉(子)を落とす
- 11、行こか走ろかお月が出たら、伊予の金子のごじよもとへ
- 12、白をひくときやかくびきおしな、白のかくびきや粉があら
- 13、白がいやさにうどん屋を出たら、生まれやいかに湖みひかす

## 4 粃すり歌

- 1、くるりくるりと回るは淀の、淀の川瀬の水車
- 2、娘一八嫁入り盛り、持たせてやりたいこの八木を
- 3、ここのお庭が勇むよになけりや、うちのだんなの気に入らん
- 4、歌うておかけよ粃かけさんよ、ここのお庭の勇むように
- 5、ちようちよちよちよいすり上げて、晩にや道後の湯に行こぜ
- 6、おいでや秋に、秋においでや米買いにな
- 7、粃じや粃じやお手代さまは、粃の中から出た米を
- 8、ざんざんざんざんとすり上げておいて、あすは道後の湯に行こぜ
- 9、粃すりぎっこさん粃なんぼすった、一斗五升すった、そらそらすれよ
- 10、今夜は粃すり人まね手も揃い、まわす白には黄金が光る
- 11、歌うておすりよ勢いかけて、歌うて御器量は下がりやせぬ
- 12、恵比寿大黒喜ぶほどに、積み上げます俵の山を
- 13、今宵のすり見てこれと思った、今はすり上げかおめでたや
- 14、賃ずりする人はほいとより劣り、どこのお庭で歌うやら
- 15、かわいい主さんの粃すり姿、枕屏風の絵がほしい
- 16、からな小柄な、こまめなまめな仕事ようする嫁ほしや

- 17、梅と桜と両手に持ちて、どちらが梅やら桜やら
  - 18、鶏が歌うたらいぬるとおしやる、きかしともない鶏の声
  - 19、とろりとろりと寝たい時にや、かわい殿御もうせりやよい
  - 20、沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の舟、蜜柑舟
  - 21、蜜柑舟なら急いでおいで、今は蜜柑の値のもどり
  - 22、下へ下へと枯木を流す、流す枯木に花が咲く
  - 23、何をくよくよ川端柳、水ではなをみて悔む
  - 24、山に伐る木はたくさんあれど、思うて伐る木はさらに無い
  - 25、来いというたとて行かれた道か、道は四五里波の上
  - 26、一九出な出な門より外へ、外にや二一さげ刀
  - 27、咲いた桜にや風が毒よ、若い嫁さんにや子が毒よ
  - 28、竹の切り株溜った水よ、澄まず濁らず出ず入らず
  - 29、心ばかりをかよわせておいて、蟬のぬけがら身はここに
- 5 桑摘み歌
- 1、蚕飼いははれなよ息子、僅か二〇日か三〇日
  - 2、蚕飼い習うて糸とり習うて、蚕糸習うたら手の先生
  - 3、娘一八番茶もではな、えんそかずらに花ざかり
  - 4、かわい殿御が来る夜がわかる、うちの小池の鴨が立つ
- 6 どうづき歌
- 1、やんさもやんさと言ったら綱をとれ
  - 2、やんさもやんさと言ったら綱を引け
  - 3、ここの屋敷はめでたい屋敷、鶴と亀とが舞を舞う
  - 4、嬉しめでたい若松様よ、枝も栄える葉も栄える
  - 5、ここの屋敷はよい屋敷、ぐるりが高くて中低くて、一分や小判がそれぞれ込む
  - 6、おんどりさんは橋からころげて、橋の下から鳴き音頭



どうづき風景

- 4、四にはエー、四には信濃の善光寺様じゃ、それエンヤラヤー
  - 5、五にはエー、五には出雲の大社様じゃ、それエンヤラヤーエンヤラヤー
  - 6、六にはエー、六には武蔵の観音様じゃ、それエンヤラヤーエンヤラヤー
  - 7、七にはエー、七には奈良の橿原神宮様じゃ、それエンヤラヤーエンヤラヤー
  - 8、八にはエー、八には八幡の大菩薩様じゃ、それエンヤラヤーエンヤラヤー
  - 9、九にはエー、九には高野の弘法大師様じゃ、それエンヤラヤーエンヤラヤー
  - 10、一〇にはエー、一〇にはここの氏神様じゃ、それエンヤラヤーエンヤラヤー
- アリヤエーヨイヤナ  
ソレヨイヤナ
- 1、一にはエー、一には伊勢の大神宮様かい、それエンヤラヤー
  - 2、二にはエー、二には日光の東照宮様じゃ、それエンヤラヤー
  - 3、三にはエー、三には讃岐の金刀比羅様じゃ、それエンヤラヤー
- エンヤラヤー

## 7 機織り歌

- 1、神か仏か機織りさんは、いつも鳥居の前に住む
- 2、眠むたい目をしておそどにあけて、木綿引く見りやなおかわい
- 3、遠くはなれてとんではいれど、切れてはおらないたこの糸、タンカラ  
リータンカラリー

## 8 馬子歌

- 1、馬よ歩けよくつ買うてはかそ、二足五文の安ぐつを、ホイホイ
- 2、馬よ歩けよくつ買うてはかそ、帰りやとうきび煮て食わそ、ホイホイ
- 3、三坂越えすりや雪降りかかる、もどりや妻子が泣きかかる、ホイホイ
- 4、むごいもんぞや明神馬子は、三坂夜でて夜もどる、ホイホイ
- 5、遠い山道鈴の音がするが、あれは恵原の兼さんか、ホイホイ
- 6、馬に六把の肥え草つけて、わしは一把を負うて出る、ホイホイ
- 7、馬に八把の荷が重過ぎる、わしが半分分けて持つ、ホイホイ
- 8、馬の手綱を子どもに持たせ、かかあが一把にわしが二把、ホイホイ
- 9、馬子の女房は朝が早うて、眠い晩は帰りが気にかかる、ホイホイ
- 10、箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川、ホイホイ
- 11、坂は照る照るすずかは雲る、あいの土山雨が降る、ホイホイ

## 9 木挽歌

- 1、大工さんよりやこびきが憎い、仲の良い木をひきわける
- 2、こびきさんかや松皮の山で、鋸の歯をする音がする
- 3、何んの因果でこびきを習うた、花の盛りを山小屋で
- 4、こびきさんたちや一升飯食ろて、鋸の柄のような糞たれる
- 5、こびきやひけお前は削ずれ、深山天狗は木を倒せ
- 6、こびき女房になるなよ妹、妹だまして姉がなる
- 7、こびきやこん引きこんさえつめりや、石の枕もひき下げる

## 10 茶摘み歌

- 1、お茶をとるなら細かにおとり、久万のお茶でおいしいわい
- 2、久万は茶どころ茶はえんどころ、娘やりたやむこほしや
- 3、向こうに見えるは茶摘みじゃないか、白い菅笠ちらちらと

## 11 草刈り歌

- 1、奥山の草刈りばんこ、粟に花が咲いたぞな、咲いたぞな、奥にはとうか  
ら咲いたぞな
- 2、来いとことづけ夜に二度三度、行かになるまいひとたびは

## 二 祝歌ほか

### 1 ぞめき節

- 1、このの邸はめでたい邸、西と東に倉が建つ
- 2、旦那大黒奥さんえびす、できたその子が福の神
- 3、うれしめでたの若松様は、枝も栄える葉も茂る
- 4、お前百までわしや九九まで、共に白髪のはえるまで
- 5、一〇が九つ思いごとはかのうた、末は鶴亀五葉の松

### 2 さんころ節

- 1、歌いなされやお歌いなされ、歌でご器量は下がりやせぬ
- 2、出たよ出ました藪から笹が、つけておくれよ短冊を
- 3、さんごさんご名は高けれど、さんごさほどの器量じゃない
- 4、吉原女郎見てうちの娘見れば、千里奥山古狸
- 5、色は黒てもどんこのよでも、妻と定めりや憎くない
- 6、人は金より心というが、わしはそれより器量がよい
- 7、男やもめにや蛆わくけれど、後家にや五色の花が咲く
- 8、桜三里は源太の仕置き、花は咲くとも実はなるな

3 盆踊り歌

- 9、桜三里は金刀比羅街道、あれを越すのが楽しみな
  - 10、金刀比羅参りで糠餠なつかん買って、もどり子どもが奪い合い
  - 11、歌うて来よらいあの山道やまみちを、かわいい殿さんが良い声で
- 3 盆踊り歌
- 1、盆が来たとしてうれしゅうはないよ、越後かたびら着るじゃなし、  
ソラヤートエーヤートセ
  - 2、太鼓たたいておどりこ寄せて、中でよいのを嫁にとろう、  
ソラヤートエーヤートセ
  - 3、そろたそろたよおどりこがそろうた、稲の出穂よりなおそろうた、  
ソラヤートエーヤートセ
  - 4、わしとお月といっしょに出たが、月は西行きわしや今ここに、  
ソラヤートエーヤートセ
  - 1、備前岡山さくしゅで津山よいよ、伊予の松山それはたばこ山、  
あややととこせ、よういやな
  - 2、おどりおどるなら三〇まで踊れよいよ、おどり好きならそれは子が踊る、  
あややととこせ、よういやな
  - 3、備前岡山神殿見ればよいよ、鶴と亀とがそれは舞いを舞う、  
あややととこせ、よういやな
  - 4、竹に雀が品よくとまるよいよ、とめてとまらぬそれは伊予もみじ、  
あややととこせ、よういやな
  - 5、千秋万歳楽しい思いごとかのたよいよ、鶴と亀とがそれは舞いを舞う、  
あややととこせ、よういやな
  - 1、そろたそろたよ踊り子がそろたよいよ、稲の出穂よりほんまにやよく

- そろた、 よいよ、 よういやな
- 2、踊り踊るなら三〇まで踊れよいよ、三〇過ぎたらほんまにや子が踊れ、  
よいよ、 よういやな
  - 3、相撲とるなら桜のもとでよいよ、どんと投げたらほんまにや花が散る、  
よいよ、 よういやな
  - 4、娘しまだにやちようちようがとまるよいよ、とまるはずだよほんまにや花じゃもの、よいよ、 よういやな
  - 1、咲いた桜になぜ子馬をつなぐ、よいとな、子馬が勇めば花が散る、  
よいとなよいとな
  - 2、そろたそろたよ踊り子がそろたよいとな、秋の稲穂よりよくそろた、  
よいとなよいとな
  - 3、鐘が鳴る鳴るあの山越えてよいとな、水の都に日が沈む、  
よいとなよいとな
- いつも七月盆ならよかろう  
踊りひずけで殿御見る  
盆が来たなら妻に米まぜて  
それにささげをちらほらと  
踊り子が来た松坂越えて  
赤いたすきに菅笠で  
盆にくわりようかかねこの茄子なすび  
なにごくわりようか花じゃもの  
音頭とる子が橋からこけて  
橋の下から泣き音頭  
踊る中でも品のよい子ども

うれしかろぞやふた親は

太鼓たたいて踊り子寄せて

品のよい娘を嫁にとる

1、(A) 竹の切り株にやよ濁った水は、よいよい

(B) 澄まず濁らず出ず入らず、やととこせよいやな、ささよいやな

2、(A) 下へ下へとよ枯木を流し、よいよい

(B) 流す枯木にや花が咲く、やととこせよいやな、ささよいやな

3、(A) あなたみたいたいな牡丹の花は、よいよい

(B) 咲いております来る道に、やととこせよいやな、ささよいやな

4、(A) 梅にほれても桜にやほれな、よいよい

(B) 同じ花でも散りやすい、やととこせよいやな、ささよいやな

5、(A) 思うて来たのに水かけられて、よいよい

(B) あだな思いが水となる、やととこせよいやな、ささよいやな

6、(A) 梅と桜と両手に持てば、よいよい

(B) どっちが梅やら桜やら、やととこせよいやな、ささよいやな

7、(A) 桜三里はよ源太の仕置き、よいよい

(B) 花は咲いても実はならん、やととこせよいやな、ささよいやな

8、(A) 花が見たけりやよ吉野へ行けば、よいよい

(B) 今は吉野の花盛り、やととこせよいやな、ささよいやな

9、(A) お前百までわしゃ九九まで、よいよい

(B) 共に白髪のはえるまで、やととこせよいやな、ささよいやな

#### 4 客席での笑い歌

1、一つとせ、一つの魂胆こりやどうじや

人の前でもさそさそと言うて出すのが、将棋盤

2、二つとせ、二つの魂胆こりやどうじや

太うてはいらにやつばつけてもんでお入れよ、針の穴

3、三つとせ、三つの魂胆こりやどうじや

短こうて届かぬ気の悪さ元まで入れてよ、背中かき

4、四つとせ、四つの魂胆こりやどうじや

横では滴しずくがこほれます、まともにおさしよ、雨傘を

5、五つとせ、五つの魂胆こりやどうじや

今行くそれ行く出るぞと言うて出すのか、渡し舟

6、六つとせ、六つの魂胆こりやどうじや

無理にかまえ押えつけ入れて泣かすのが、かごの鳥

7、七つとせ、七つの魂胆こりやどうじや

泣くほどいたけりやちよつとやめて後でおさしよ、目薬を

8、八つとせ、八つの魂胆こりやどうじや

やめりや泣き出しおこり出し入れりや喜ぶ、親の乳

9、九つとせ、九つの魂胆こりやどうじや

こんなによいと知らなんだ、奥まで入れてや、背中かき

10、一〇とせ、一〇の魂胆こりやどうじや

とても喜び抱きついて泣いて出すのが、孫みやげ

#### 5 雨乞いうた

雨を下されや ヨイヨイヨーホイ 龍辰りゅうたつさまよ

降れば五穀のためとなるよー

雨よ降れ降れ イヤヨーホイ しんのばらばら

ばあらとえー ヨーヨイヨイ

### 三 わらべ歌

#### 1 亥の子歌

○お亥の子さんという人は

一で俵踏まえて、 二でにっこり笑うて、 三で酒造って

四つ世の中よいように、 五ついつものごとくなり、 六つ無病息災に、

七つ何事ないように、 八つ屋敷を掘り広げ、 九つ小倉を建て並べ、

十でとんとつき納め、この家繁盛せい 繁盛繁盛大繁盛、

もう一つおまけに大繁盛

○亥の子つきを拒否した場合

亥子、亥子、亥子餅ついて、祝わんものは、鬼産め蛇産め角のはえた子産め

#### 2 手まり歌

1、正月とえ、障子あければ万才がつづみの音やら歌の声、さあ歌の声

2、二月とえ、神社参りや寺参り、あすは彼岸のお中日、さあお中日

3、三月とえ、桜花にはおひな様、きれいに飾った内裏様、さあ内裏様

4、四月とえ、死んでまた来るお釈迦様、竹のひしゃくで茶々あがれ、さあ茶々あがれ

5、五月とえ、ごんぼしほりの前かけを、正月結ぼとのけといた、さあのけといた

6、六月とえ、ろくに結ばん前かけを、ころんでよごしてはらがたつ、さあはらがたつ

7、七月とえ、質に入れたり流したり、質屋のおばさん懇切な、さあ懇切な

8、八月とえ、蜂にさされて目が痛い、姉さん葉はないかない、さあないかない

9、九月とえ、草の中には菊の花、姉さん一枝折ってんか、さあ折ってんか  
10、十月とえ、重箱さげてどこへ行く、おいべっさまのお使いに、さあお使いに

○一かけ二かけ三かけて、四かけて五かけて橋かけて、橋のらんかん腰おろし、はるか向こうを踏むれば、十七、八のねえさんが手には花持ち線香持ち、ねえさんねえさんどこへ行く、わたしは九州鹿兒島の西郷隆盛娘です。明治一〇年三月に、切腹なされた父上のお墓へ参る途中です。

○おん正正月は、松たてて、竹たてて、年詞の御用に行きましよう

おたばこぼん、お茶もてこい、なんぞ吸い物早もてこい

ひいや、ふうや、みいや、ようや、いつや、むうや、ななや、やあや、このや、とう

とおからおいでたおいも屋さん、おいも一貫はいくらかね、二四文でありますぞ

もうちいとまからんか、ちゃからかぼん、お前のことなら負けたぎよう

隣のおばさんちよっとおいで、おいものころがしこれあげよ

ひいや、ふうや、みいや、ようや、いつや、むうや、ななや、やあや、このや、とう、とうで一回おさめた

○日清談判破裂して、品川乗り出す吾妻艦、続いて金剛、浪速艦、先を行くのは松島艦、玄海灘を乗り越えて、黄海表で敵に、砲弾浴びて戦こうで、敵の平遠、定遠撃ち沈め、鎮遠号を捕獲して、めでたく凱旋いたしま

すこれが戦争のはじめにて、陸上海上大勝利  
ひいや、ふうや、みいや、ようや、いつや、むうや、ななや、やあや、このや、とう、とうでとうとう勝ち通し、勝利勝利大勝利

○朝起きた、父さん母さんどこへ行た、馬を引いて牛追うて、奥の山へと草刈りに、わたしやおうちでお留守番、お留守番

妹が弟が次から次へと起きてくる、おまんま食べて連れだつて、近所のお友だち、お友だちとお宮のお庭で遊びます

字かくし、葉かくし、手まりつき、ひいや、ふうや、みいや、ようや、いつや、むうや、ななや、やあや、ここのや、とう

十人寄つたらにぎやかに、大飛び小飛びもできます、そりや大飛び小飛びでおまりがお背なに納まつた

○お正月はよいもんじゃ雪のようなまま食べて、木の葉のようなじじ(魚)

食べて、お袖の長いベベを着て、羽子板ついてたこ上げて、まりついてこまを回して遊びます、早くこいこいお正月

### 3 なわとび歌

○大波小波、風が吹いたら回しましょう、いちりき、にりき、さんりき、しりき、しきりき、すっぽんぽん

### 4 子守り歌

○ねんねんころりよおころりよ、ねんねのお守りはどこへ行た。あの山越えて里へ行た。里のみやげに何もろた、でんでん太鼓にしようの笛、それをもろうて何にする、吹いたり、たたいたりして遊ぶ、坊やはい子じゃねんねしな、ねんねんころりよおころりよ

## 四 迷信・俗信・まじない

迷信・俗信・まじないは、ともに、地域の人々の生活と密着しており、一笑にふしてしまふことのできない意味と、深い味がある。これらを厳密に区別することができない場合もあるので、羅列することにする。

### 1 まじない

ア、股またや喉のどのリンパ腺がはれた時、杓しやくの柄をはれたところに当て、反対の杓の中へやいとをすえる。やいとをすえる人が「そこらにヨ、コネはおらんか」といいながら、きよろきよろして、捜すまねをする。すえてもらっている人は「おらん、おらん」と答える。これでリンパ腺のはれはすべるといふことである。

イ、歯が痛む時、「天竺てんじくのウカカの山の青き虫、根は食うとも葉(歯)は食うな。あぶらおんげんそわか、あぶらおんげんそわか、あぶらおんげんそわか」と唱える。すると歯の痛みがとまるということである。

ウ、まむし(はめ)にかまれないようにするためには、「天竺のリュウシャ河原に昼寝して、チガヤの芽に縫い通され、ワラビの恩を忘れたか。あぶらおんげんそわか。(このところだけを三回くり返す)」と唱えながらワラビで身体をこするとよい。

エ、子どもが夜泣きをする時、「天竺の古竹ふるたけ敷の古狐、昼は鳴くとも夜は鳴くな。あぶらおんげんそわか。(ここは三回くり返す)」と書いて、子どもの枕の下に敷いて寝させると、夜泣きしなくなる。

オ、妊婦が産気づいたとき、早めに産ませるために、「へたな大工がこしらえた馬ぐわ、つかがはずれて子が抜けた。あぶらおんげんそわか。(ここは三回くり返す)」と唱えるとよい。

カ、いもち病が稲についた時、「二〇月の亥いの子こがこんうち、いもちつくとはだれが言うらん。あぶらおんげんそわか。(ここは三回くり返す)」と声高く唱えると防除できる。

キ、やけどした時、「猿沢の池の大蛇がやけどして、水におぼれて火にやけた。あぶらおんげんそわか。(ここは三度くり返す)」と唱えながら、ほうちょうをやけどのところまで回すとはやく直る。

ク、てしろがおきた場合、「カズネ山の恋男、まねいてもまねいてまだこん



と唱えながら、東を向いて手招きをすると痛みがひく。これは女の場合で、男の場合は、「……恋女……」といえよ。

また、男におこった場合は女の末っ子に、女におこった場合は男の末っ子に、鍋、したみなどのつるに手を通して糸で手首を縛ってもらえば直る。

ケ、しびれがきた時は、つばを指先につけて十の字を書くといよ。

コ、子どもができた後、産婦にちぐさ(乳のはれる病氣)がつくと、「鯉」という字を乳の上に見えるだけ多く書く。そうすればちぐさは直る。

サ、乳歯が抜けた時、上の歯であれば床の下に投げ込んで、「ねずみの歯より早くはえ！」と唱える。また、下の歯であれば屋根に投げ上げて、「雀の歯より早くはえ！」と唱える。そうすると、永久歯が早くはえる。

## 2 迷信、俗信

ア、火遊びをすると寝小便が出る。(火遊びを禁止するためのもの。)

イ、顔にすみなどをつけて寝ると、恐しい夢を見る。(ふとんのよごれるのを防ぐためのもの。)

ウ、かえるや蛇をいじめると、寝ている時に腹の上をはう。(殺生をいましめるためのもの。)

エ、夜、口笛や竹笛などをふくと魔が出てくる。(夜の騒々しさを防ぐためのもの。)

オ、しゃくしをなめると、嫁入りする時犬がはえる。(女の子の行儀の悪さを戒めたもの。)

カ、塩を粗末にすると貧乏になる。(物を大切にさせるためのもの。)

キ、塩を借りておくとお産が重い。(他人に物を借りてそのままにしておくことのずるさを戒めたもの。)

ク、米つぶを粗末にすると盲目になる。(米一粒でも大切にすることを戒めたもの。)

ケ、爪を焼くと二〇年後に気がふれる。(爪を焼くといやなにおいがでるた

め、それを防ぐためのもの。)

コ、雨だれに小便すると目いぼができる。(小便によって庭がくさくならないようにするためのもの。)

ク、みみずくに小便をかけるとちんちんがはれる。(小さな動物をいたわることを教えたもの。)

シ、雷が鳴る時に着物を着ていないとへそをとられる。(夏、子どもは着物を着るのをいやる。それで腹が冷えるのを防ぐためにいわれたもの。)

ス、雨の降る日に人のまねをしていると、その人のようになる。(身体障害者へのあたたかい同情を教え、人を馬鹿にすることを戒めたもの。)

セ、足のとりこのふし(足首の関節)をけがすると、塩三俵食わぬと直らない。(足首の関節のけがは長びくものであるということを暗示したもの。)

ソ、死んだ人のぞうりや着物を使用すると、夏やせしない。(死んだ人の物だといっけきらうことなく、物を大切にすることを示唆したもの。)

タ、ご飯を食べてすぐねると牛になる。(行儀の悪さを戒めたもの。)

チ、茶びんに口をつけて茶を飲むとかたわの子ができる。(行儀の悪さを戒めたもの。)

ツ、夕方かくれんぼしていると魔がさそう。(夕方おそくまで遊ぶことを禁じ、家に早く帰ることを教えたもの。)

テ、火吹き竹を反対に吹くと双生児ができる。

ト、けがややけどをした時、親のつばをつけると早く直る。

ナ、夜爪を切ると親の死にめに会えない。

ニ、猫が顔を洗うと日和になる。

ヌ、はきものを上にほうり、表が出るとあすは日和で、裏返しになると雨がふる。

ネ、ホテルを家の中へ入れると火事になる。

ノ、屋敷に椿やほうずきを植えると、その家は不幸になる。

ハ、夜、新しいぞうりやげたをおろしてはいけない。おろす時はなべずみをつけるとよい。なべずみをつけなかつたら魔が引っぱる。

ヒ、朝、猿の話をするとう縁起が悪い。

フ、ひつじの日の嫁入りはよくない。ひつじの次は猿であるから、ひつじ猿(去る)となつて、別れてしまう。

ヘ、朝の蜘蛛は縁起がよいが、夜の蜘蛛は縁起が悪い。夜の蜘蛛は親でも殺せ。

ホ、へびを指さすと、指がくさる。

マ、かぼちやを指さすと、かぼちやがくさる。

ミ、結婚の時にはきらずを使うとよい。縁きらずといつて、末長くつれ添うことができる。

ム、結婚などの祝い事のある日、雨が降るのは「降り込み」といって縁起がよい。

メ、さいふを買う時は春買うとよい。春買うとさいふがはるから。秋買うのはよくない。さいふがあぎとなるから。

モ、盆の日に川で遊んでいるとエンコが引っぱる。また、この日には地獄のふたがあくから、川へ行つてはならない。

ヤ、大川峰に二度雪が降ると、三度めには久万にも雪がふる。

キ、目いぼができた時は、大豆をもって井戸端へ行き、「大豆を落とそ思おもつたら、目いぼが落ちた。」といつて大豆を落とすと、目いぼが直る。

ク、火事の起こる家には、ねずみがいない。

エ、犬力より食力(久万の伝記「力石」より)

コ、とりの早や鳴きは火がさどい(「こうぼりだき」より)